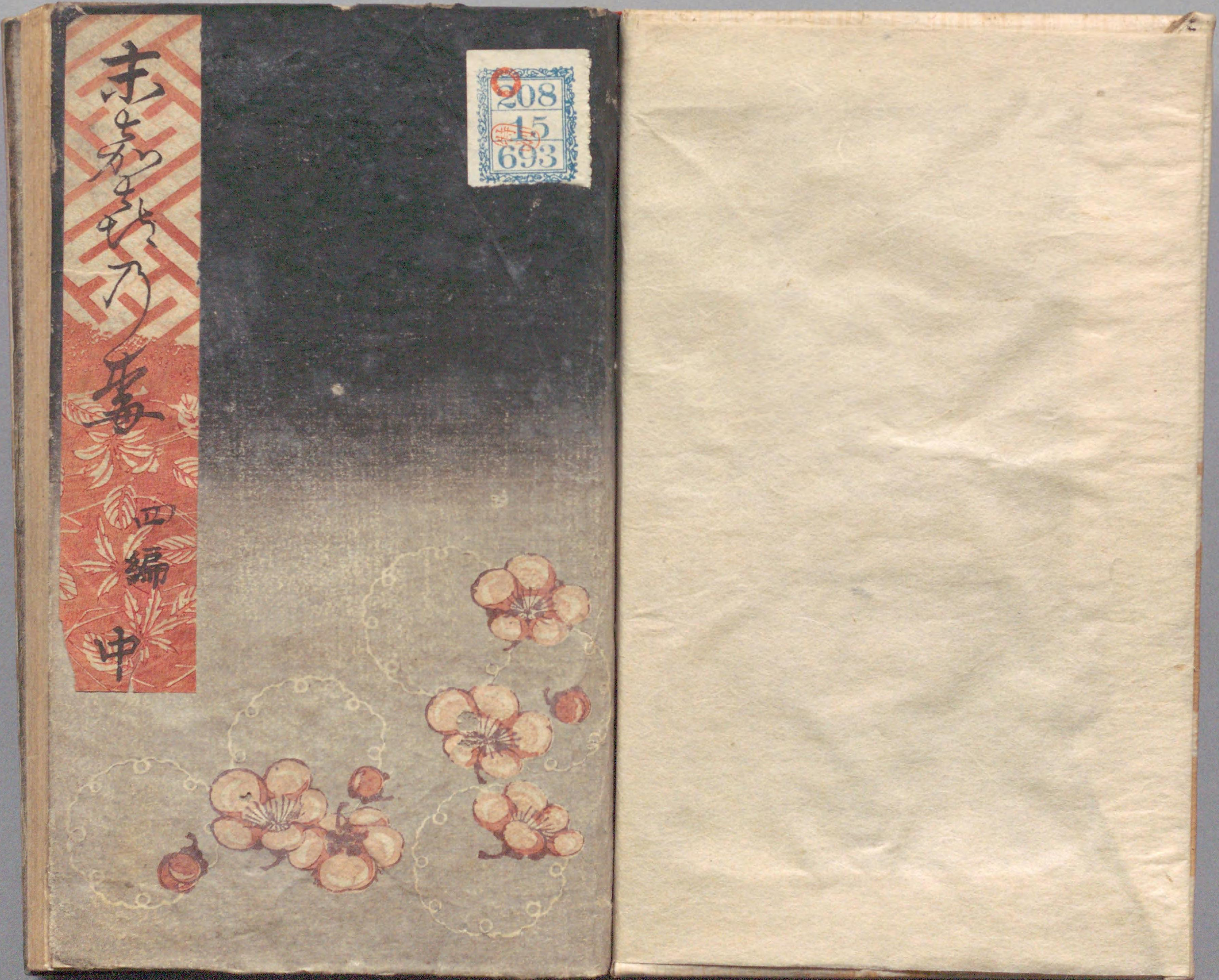
春色籬の梅　十二

208
15
693

国立国会図書館　　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用



208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

春色籬廼梅巻之十一

東都　狂訓亭主人著

第廿一回

〽瀬田の夕照はまことに夕暮てふ仲之町の燈籠の
物好はいろ〳〵さま〴〵花のすがた。いろの宮中の女房の姿も照
月なきの〽三十や紋日とそや。そく〳〵死はし山や〽鴫のう紀寐
の身なからも〽あざみ霊澤の甘いらんと。心でよねし居つゞ
けれ。〽あふ〳〵しハまそひとしぐれ。ねまて逢夜ハ稀でから

濱の「松にたふるゝ浪のおとの琴ぢにおつる雁がねハ客人が
うてこの夜づくりハ。ふけて青田にあぐらく夢さんじまで来て
蚊帳のそとア、さんと寝て浮気もあくで相ひろひをやさき夫
むなのまいぐもげに八朔の夜ろがさね。ひかの暮雪をさる
がらに絵がけどつきぬよそ山ハ。松のくわの品さだめあうろハ
かつけるけ浚ぬまゝ　梁「ヲヤ、お嬢さん何故涙をおとがしだえ
此あたりハ八景の文句ハ出しハ妾ハねえ　女「イエナニさ
あく方して間の出来しさのでハございませんヨ血の所の所為

ちつでござゐまさ　梁「ナアニ左様じやアねへよ此頃じやアお前ハ何う
全体のうちで出しなるかあるのでヨ此様な和合して居る
私よ隠さずとあかして言てお聞せなさいナ　女「有がたふ
ござゐますけれども何様も此方がひとハやさされません
ものを　梁「何故へ誰うか深く何ぞしさのごちくらえ
女「ヲヤお梁様が悟ることでおつしやいますネ何様りさ
あて言様のことハ少しも覚えハございませんヨ　梁「それで
何ごろお言なさいねへお兄上様が哀が宿屋の家へいつて

お帰りでもあつたら其手を案じておたきいひまでておまへハ
胸にぎつくり　まだ逢初てかどもなく他に知られぬ主人の
情身のうへなるを　此頃も寝かぬる夜　濡る袖をしのびしに　お麗ハ涙
あつて言ふところ発明ならず恥らうる大事のお主人様
身でいかゞらしい恥かしき面目なやと顔赤らめ詞も出ね
言様みお麗ハ膝を近く寄せ　麗「アノウお前　蝶「ハイ　麗「
ほんにもお兄上さんと情合のあるのに付て言様に背心の
うらんで私に隠さずとお言ひなる母人さんがおまへのとき
お兄上さんとお睦しく成のをおしつさるもあるから明して
おまへひとりへばかり工夫を承知しちやア下さいトいふを聞より
お蝶ハまた少し胸さわぎ　慈悲りと深き此家の主人夫婦の
情に依て多くの奉公人の中にまけてひいきうけられてゐる
身の幸　奉公人ハ世間の人も思ハね様に不便がられてそ
家の娘同様に大事にせられて　大恩ある主人で旦那と
密通も欲心ゆゑにさせしやうと思し下の役ぞ主思はざ追出
まるく相談のありもせしかと苦労になり涙を膝に落し

すぐに 富〽お藂さんへトものゝ四辺を看廻して 富〽アノネ
老嬢が其様に艶しく気を付て床下まで隠まはれぬお
世話しやまれがかゝるならば傍ひ奴ざと思し召て床下まで豆
藂〽イヱナアニ憎ひと思ふくらゐなら隠して居るものか
手裡に世話してお嫁せと言ハ為るかヨ何でも私の気でハ
姉妹ごと思って居るのだから明して お言ヨト心底切
なるお藂の羽妹しきいゝ方もなく此程よりの別深を
言んとしても言かねる恍惚子公のすゞろしきむしく

まゝよバお藂ハ莞尓笑ひつゝ兄の身振を真似てお袋の字を 富て
捻り 藂〽コレサお袋 富 其様に恥かしがらないでも此身がいふ
るのを聞なのヨ 富〽ヲヤヲヤお藂様としたことがあんまり可笑なのを
御作まだでエ 藂〽アレサ私が兄上さんの声色をつかうか
アノお聞ヨヱヲもし何ぞかけるト笑ひながら 藂〽ヱコレサお袋の戯
言じやアないハナお藂が業知して居るつもりだやア表向で御挨拶
さんにまかせるハナ。ヱ御亭主業平さまの様に好男でなけりやア
丈夫な持なひ気なり 富〽ヲホヽヽ嘘だらう何様りくさして

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

私が孫様に有体な事をお咄やつて居りましたものゝ若旦那様の御新造さまは有露町の万福屋の御娘御のお福さんと云お方のが 米「イエ夫は全体お兄上さんのお気に入らないのだから御病気を幸ひに断つてお仕舞成さつたのでございますそれでござらば随分お前がお兄上さんと御夫婦になりましたまで 民「アサ孫様の事おやびもないものならば私は夢にも思つて居りはいたしませんヨ夫よりか全く私の苦労になつて出しないのは万一大旦那さまがお出席の

旦那さまがおかくれに此一條が知れましたら直に追出して仕舞はれましたらそれこそ又苦労になりまして夜も眠られませねものを 米「イエ夫は些ともおかんじやないヨ お兄上さんが其時云てお仕ても私が合点するのはないなんでもおまへを私の側へ置ておまへさんもけれどもらば家内に居るのと言出ましたらそしてお兄上さんも一旦お前を養つてわざと置て連がないとおかしく言出したところでそれも夫をおそれてお前のまへを止まる様な業腹な気もしやうないヨ 民「まつとに此羊嬢が

然作て御下さりましたと何よりの気が丈夫になりましたけれどもまだモウ一体気になりましたが 梅「ヲヤ何がへアノ女郎衆よ此節お仏のおかげかへ 富「イヱ左様ではござりません私の宿の親父が甚く高慢で何でも曲ったことが嫌ひそしてアノ着るものハ美に見ても据が立てならぬ身分不相応なるのを着る人や立流な衣裳を着る人を着と悔しくおもつと常例やて居りました又私のハ贅をとつて一旦養子に出ても先の家の跡を継させることやて居りました

うなるのも私の自由にハなりませんヨアノウ此方の若旦那様と御母堂さまとの御噺しを承りましたのハ何でござりますか何卒お聞せ被成てくださりまし 梅「ナニネ家事のでハござりますヨ母人さんがお言のにハアノウ病気もモウ全快なさいハ早く嫁をおもらひなさいそして元の通り親爺さんと入かへて本町の正宅の方を治めて親爺さんをバ隠居なさる様になさいけますなさいとお言ひのでヨ 富「左様でござりますか夫れ則りお福さんをお嫁にするのでござりますか 梅「イヱ左様じやア

なんの夢かお聞ヨお兄上さんが其辺りのやうにアノ亡霊
ハ欲ありまし様でも兎角何ぐ不義で気が揉めて
行ませんから許へ嫡本家の世話へ出来ませんから定紋の
席へ継で居る舎弟を呼よせて家督を相続てくださるの
まし私ハ一生此別の庵に隠居して居てお墓やお位牌を相守
に供養をして居度ござりますよと終お言ひだヨ麗「ヱ左様で
ござりますかそして其時母人さんハ何とお返事ましたへ麗「アノネ
母人さんハ笑ひながら左様ならバ其方の望の通りなら

何様でもあるが宜がお麗ハ一生嫁にならずにゐても面白いまゝ
から相應な許がありましたらバお麗ハ縁付るからお前ハお家の
気にかけるこのまゝバ何様でもして無理がつて生涯と
御言ひだヨヲホゝゝゝアノ其時ハ兄上さんも少し遍塞に困て
顔を赤くして無言で御座るから又麗「ヲヤ其ならで
お母上さんも私の事をばさぞいぢらしい縁ひ奴だと思し
召て麗「イヱ何様しても左様お思ひでありませうヨ其後で
乳母とておもしろくてお麗のを縮緬と聞てからアノお兄

上さんの仰るとほりだが、おまへを何卒嫁に仕度物だが
親類どもが世間の評判も面倒だから当時のやうにおまへを
すとめしつかふ御厳方へ御奉公にでも上て夫から何所ぞ里親を
こしらへて表向嫁に入ると振りと被言ばへ 菊「お振りとして
私の様な者が御屋敷へ出られますものか 桑「ナニ其時
乳母が付てるよ お兄上さんが折角の女で御病気の紛らし
様な御蔵元蔵のを鋳るといふ悪いから則当時の通りに
御周番の御蔵元蔵方が宜いとぎつかりませうと言のを聞て

から名案じで今もヒヨトお菊ハお前の気を試す主の顔せぬ
温厚なさハ最あり難き娘さり物から帰る福左衛門俳名紋
花暁といふ風雅人なれバ此後花暁と名を呼ぶに其時
ありて懐へ入途中にて出合たる桜川親孝を同じく居合へ
通りけれバお菊ハお前ハお家をもちひ火燵を出し横桜を
立て茨へ立つけれバ 新孝「トキ二日那お頼みの訴人来ましたか
よがす 花「ハア然うそれハ大きに御苦労だけ直に知せてくろ
ノ 新「ヘイ知れましたがそれにつきりがござりますはぜ

私の了簡では、さぞ嫌しうるさがらうと存じて参りましたが
イヤ大違ひ 何でも向ふが孔子さまの再来か何かと思ふて居る 今
時の人間の頭らしい偏屈人でござりますが、宮も不平ゥ 新孝が
一生に宮の一度とハ出合ふまいといふ人物で、何も角も理屈
詰に言伏せまして逃去して参りました 花「夫さうそれハ大きく
恵んで困るノウ 新「さうすると先生の作バお花さんハまだ窮ひろう
お困りに成る事でござりませう 花「エ 何を 新「マアまア喰違しを
其作ヨ悪ひ癖で 花「ナニ 何を自己が喰違しを仕ひとるが

有のご 新「ナニ 何もまゐると仰作ましが窮屈してお在なさるぞ
なんぞ要しくぞんじまするを申ませうか 花「かしも覚ハ多いが
何ごのウ 新「アイ〳〵 稽古の品を所持して参つた新孝でも
ご存じの通り お隠しなさる可笑な若も是を隠しましたト
懐中より女の姿を書出して 新「サア是でもお隠しなさいます
まい 是も大黒屋の蔦之助さんからお頼みの役上も[illegible]
座ませぬ 花「ヲヤ 何招して夫をお貰ひ 新「エ一六夫子屋の
文嘉のもお頼みどが嫁が何ひから私らと言付て参り

ましてサア何様でござりますとまでもお国へ帰られませんっ
内外に此様まで御ちが出来ましちやア又此病気が再発し
ますモウ〳〵〳〵

旦那さまへ しん
おこや内 ゆきより

そもそも此お長が始終のことハいと長くして此初編より
説続きし まこと大俗に有るべき女の理害も深き因縁
あつて速に述がたけれバ次第の巻に委しく有るべし

次の段ハ此草紙の鎌倉の所よりぐせし小娘の伝を
見べし二編よりコウろと書あらはしてよまるべし

第廿二回

春告鳥や梅ハまだどこにありつねど。ト八芭蕉翁の秀句
あつて是と人情の極意なりん兎丈らが筑波根の峯も
まりやく夕栄に雲の衣 如月や 遠所も名に霞の向が
浮世のうき言の人 白髭に 積が為衆の夕凪ても関
屋のあるこより 笑簾おろせし 家根船に一節きこえさ

弾くは昔を今に一中節

〽まちがまどにあかり引かけて見る方の月のかげらの
花やさくかげに花かづら色もかに花の都より辰
巳にひかるゝ宇治の里山の姿も眺めもなかめなる
桐生の春風のまぶざんざのこゑにのせ来る不行灯
琴のしらべの雪やこんこと霰やこんこと庭のし桜が
ちりぬるちらくし春風にさそうてきた来る雪を吹せば
雪と見えまがふきまくる花よしのせうがしいろくの

花笠日傘番笠の紐を結ぶの都路。
ト唄のうけて簾の隙をおし明け　若菜小槌〽ヲヤモウ浅房の入
相ごまかんぞう一中節といふものハこんな眺のある文句でも
外がより陰気に聞えるヨ　そして粗相どうも此所の調子が
むづかしくつて夜べもとんど新参さんにおそはつたけ
けれどもまだ出来ませんねハ　若菜小槌〽アイ　粗相もどうも節がむづ
かしくつてなかなか覚えられませんヨ　梨が小機さん今植木の
座敷で西河岸の旦那が言ハしつた　其ノおまへの事などを

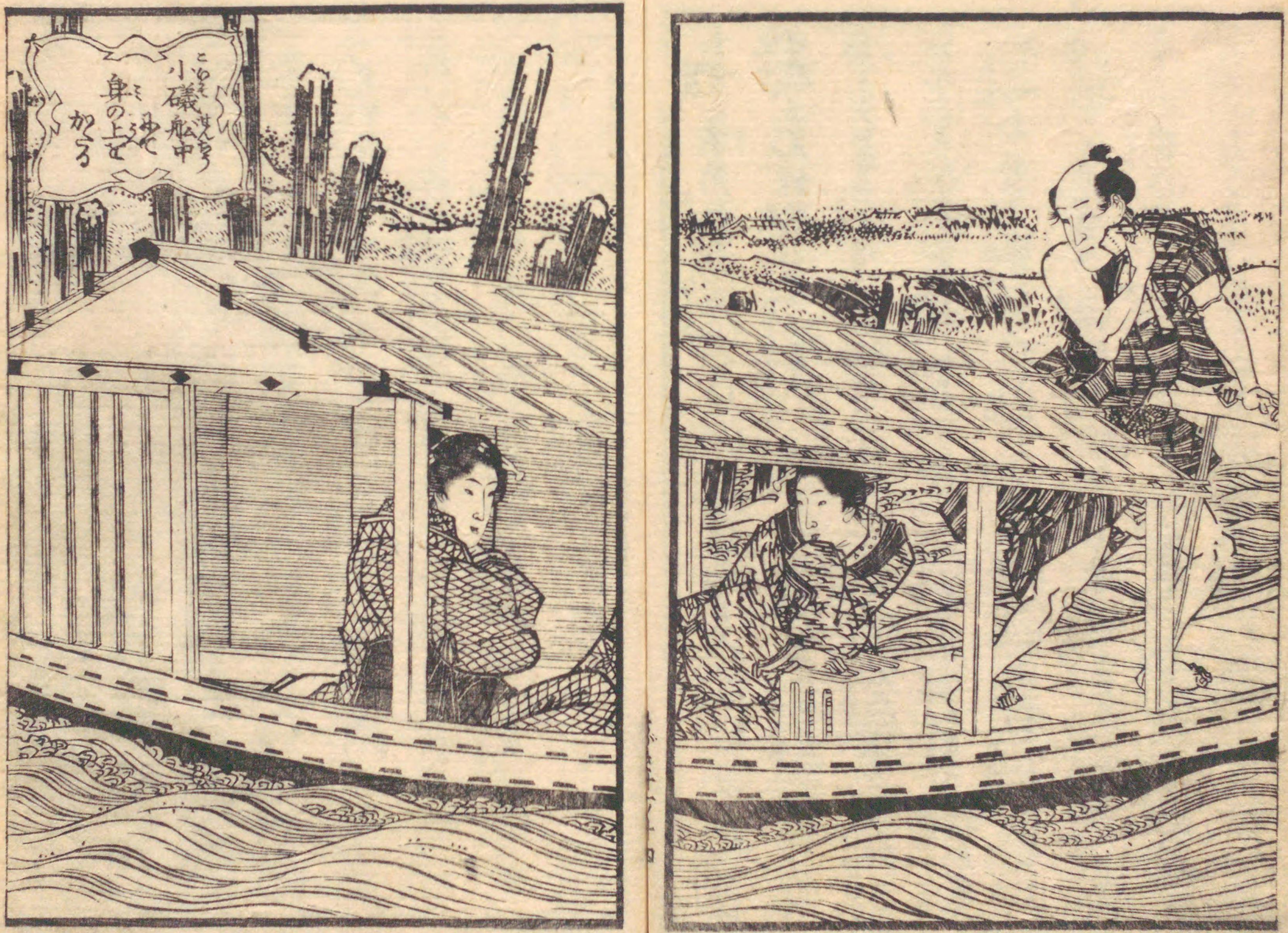
まる気でゑ　小織「ヲヤ〳〵お気毒エ　仲次「アレサお気毒だわネヘ
やすお前も余ほど粋気だノウ　あゝお前も深いのぞみだと
ゆふがあるをりへとまへ聞さけれども　お種の頼みのうへ粋
ねへが西河岸の方を諾と言てお見なさるとも大人仕合だぜ
其がどんなことを言ふともあつしくちへ入でもきるゆうぐさけれども
も身内一めの旦那はお前も知つて居るとほり諸事に引
つきあつてサ其上切もいゝが粋ぢやんぢやうが中さんでも三馬
さんでも大体誉て居るからちやうど当りヨ小織さん

織「アイまことに家のお前
最う一ト思案してお見でなさる
さんや清さんが左様深切に言つておくんなさるから私も
どうぞとおもつて居りましたけれども何様も左様はいへ
済ない義理がありますから折江町の貴様さんにも
委しく細話して訳を頼んで置ましたヨ何もまた私が旦那を
嫌ふのなんのと言ふのぢやありませんから決して悪く
思つてお呉れなさんなエ　仲「ヲヤ其れぢやア余ほど程なふりね
訳があるのだネ私に深くとも粋なことばかり話して安心

国立国会図書館　春色雛之梅 15巻 208-693
ガラス使用

きいてお呉なお嫁もおまへが願ひがあるとおつしやつて言て
お年ごろ許嫁の気になるヨ　織「ナアニ子　此嫁にこゝろ易く
姉妹の中よくしてお呉なさるお前さんに身を隠しての
あんのと言ふのじやアありませんが人に話説のも立る様
らしい変りもありませんかへサ　仲「ナニ　誰人も外に聞
てくれまし許嫁と向ふから御嫁に悦しいらしいのでも
おまへかしこくても親からお世話ヨ　織「アレサ　まん嫁に嫁しいのと
だと親けましても窮う男の無しても気が替でありませんヨ

ト言ながら少し涙ぐむ　仲は兼てより深切ものゆゑ　仲「アヽ
小織さん　お前まで許嫁も他なかうちから其様にまで
懸しちやア厭ですヨ　他なしさ妹で涙ながらお涙を浮べ許嫁も
ありがたう聞けば仲から嬉しいねえ様子ですヨ　織「ホンニ　嬉しくて
お呉よ　ツイ嬉しさで来たから涙が出さうでホヽヽヽ
仲「サア　そんなら涙ばかりに初めからの様子をお話な　織「ソン
ならば詰らぬ間でお呉よ許嫁元は零蘭の
方でそだてられましたけれども父親が早く死去ましたから



国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

亜蘭湾にも居たがまだ母親と両人で鎌倉の亀ヶ谷
といふ地所に伯父さんが居なさるから夫を便りて行うとん
ざんまのほへ其時私が母さんは十二才の時母も夫から鎌倉に
二年ばかり居る中にふと亜蘭湾に居た時分私を下さ
がつてお呉の丁雅さんといふ人お客に七里が濱でお目に
懸つてその客の名で居なさる小濱さんといふ藤の家
を誘引てあげるのが縁となつて丁雅さんの内へ私も母
親も引越て不自由なしに世話をしてお呉なさるうち母

親も死去し夫からは私ひとりになりましたから丁雅
さんが我のする不便がつてまあ寄の三味線ばかりを仕込んで
お呉でも親身も及ばないほど世話をしてお呉なさいまし
のを私が十六の年ふとしたことから不義理なことをして
私やア死で仕舞ふ夫でなけりやア尼にでもなろうかね
けれどもどふも頼の向ひまるへことを仕ましたのを小濱さん
が色々と内證で世話をして折江町の今の姉さんの方へ
頼んで一人弟子といふも不気けれども座敷へでも出ております

揚に今門さんでありますヨ 仲「ヲヤ左様かへ そうして其ふ
義理ある事をしたと お言の是 其時分に なんぞ 出来ても
仕方の無へ 織「エ。イヱト 言まして 少し 口ごもる 仲「ヲヤサ何も
遠慮は無へわな 八子 此殿はヨ ホ〳〵〳〵
春水伏て曰 這回に著したる小織と言る人 先く
内評判を出されし 素告家の拾遺 雛の梅と
外題せし 小冊の初編の上の巻に 拝しの有り 行
女性の つねんとて 添 消を頼し 来役所ある

其は今本文に詳なれども 雛の梅も 書紙
重ねて ちや見えまれたりし 婦女子のみもなふん
うちはらいて 這回に 続けて 補春作者の 雛の
梅を操返し 再覧しられども 委細しきにもを
知るよしもなく
織「それ 支ぢろて 今の跡を 松が幽臣と お糸さん きうと お案
だものヲ 仲「イヱ 実は 仕方がねへヨ 新ちやんとして 居て 恐
居るからさア お言ナ 織「アレ そんなに 真面目な 顔をして

御座(おざ)じやア私(わちき)やア否(いや)だけれども話度(はなしご)思ひまするのを仲「ヲヤ本に
大(たい)そうにせがりしやるねエ夫(それ)じやア何(なに)かして居(ゐ)ればば彼(かの)ごとエ
織「エ何(なん)ぞ常居(いつも)の様(やう)にして笑(わら)ハずに居(ゐ)て御覧(ごらん)な是(これ)といふ
よくチ仲「ヘイくウーとありまする織「アヽお徒(いけ)ないねエそんなお戯(ちゃ)
閑(ひ)しそうかね私(わちき)やア止(よ)そうや仲「ナニ戯(ちゃ)ンと閑(ひ)だとすら何ぞ
かアサアお話度(はなしご)私(わちき)も笑(き)うけて閑(きう)なのと気(き)がかるから織「今
さながしさ雅(てうが)さんといふ旦那(だんな)のお宿に奉公(ほうこう)して居(ゐ)て見(み)
洞(ずい)の子供(ども)さんに長吉(てうまつ)さんといふのがありまして此(この)千私(わちき)が

深(じん)く心安(こゝろやす)くなつて馴合(なれあひ)で見(み)ると其(その)長(てう)さんといふのが私(わちき)と
同様(おんなじやう)に大(だい)すきになつて姉(あね)さんとおふ三人(さんにん)で詮議(せんぎ)をして
居(ゐ)るのを長雅(てうが)さんの御新造(ごしんぞう)さまがアノ悪(うゑきさう)根(こん)だといつて姉(あね)さん
をまだ山梅(さんめ)の方(はう)へ嫁(えん)付(づけ)てその長(てう)さんハ庭(には)へ引越(ひきこし)てお侍(ぶしゃ)代(だい)に
来(き)て去(さ)つて居(ゐ)ると双方(ふたり)にそんな事(こと)をいつてもあんまり関係(かんけい)と
中(なか)でやうすト言(い)ふこして頬(ほゝ)を赤(あか)める仲「ヲヤ夫(それ)じやア其時(そのときに)長
さんと中(なか)がよくなんしたのエ織「アレサ本(ほんに)～～仲「私(わちき)もうらやましうござるエ
織「エ夫(それ)から子供(せんくし)三年(ねん)ばかり立(たつ)て私(わちき)が丁度(ちやうど)十六歳(さい)の春(はる)

深い訳があつて長さんがお店を請落を仕たと言その時
傍で聞ばを付て身を投て私がお助ましたのも混雑の紛
夫を聞てからといふものハ親へも云ず気狂の真似して
手前が米八さんやお花さんやお亀さんが寄つて意見を
丸で耳にも聞ずに義理も何もすてられて仕舞て家出を
して長さんの跡を尋ねても知れようはづもなし仕方がないに
此まゝにして身を投やうと仕たのを仲の町の一文字屋の
親方に見助られて先刻も言つた様に小浜さんがよく知

私のかうしてまる様に言て聞せるまつとうな若い衆は
内のやうな長さんに逢まへる様な時節もあらうかと思ふに
夫を楽しみに今日が日まで永らへて居るんでありますヨ
ト言ながら襦袢の袖口にて眼涙をふく　仲「ヲヤそんなら
長さんの行方ハ今第に知れないのか　磯「アイ夫が知れる
位ならバ此様に気をもみハ仕ませんけれども　仲「夫ニそう
だよヱ何故また長さんがお店をどうして出たらうネヱ　磯「ヱ
あの子が是だらうハどうも米八さんゆゑお前様がさぞさぞ自慢

かゝけつして蒲らの浮世のすゑのとらのものじゃァ目のうら嬉しえ
言て起りますんヨ　仲「ヲヤ丈どやァよろしくる淫ハ沢ざァノ　織「アイ
今までの此稽古浮沈ハ悟兄ゆるも出来ハ法るハけれども法ハ
お藤さんの深切を知らずさまで面白くも見へるまいが
それは嫉さけきんで意見するごろうねェどふぞ此すべ如
およもあんなあるまいけれども他人ハ決してヨ　仲「どふして
達人ホいのかのうそト言ふ行う船沢の出のふで　松「ヲイ相
屋うり一　仲「ヲヤ宿う御嬉人着さうごヨ

作者曰又此倡女の咄しの続きハ第十二の巻廿五回に
いろいろそあり且此妓あつていますごさるあらましを記る
さる玉楼のお袖お花其外のこらずつゞき次へ着
容の都合よくよろしくないとこと願ふ

春色籬之梅巻之十一了

208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用